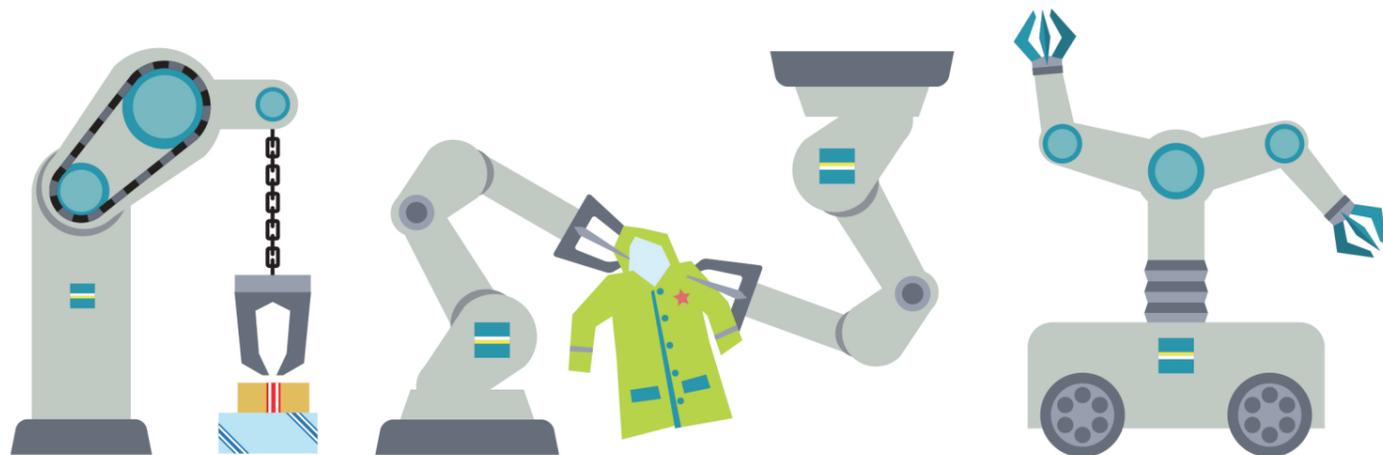


巻頭特集

ロボカップ2017名古屋世界大会



主な内容

- 本学初の裁判所職員総合職試験合格
- インターンで子ども用の高視認性レインコートを開発
- 就職内定者インタビュー
- スポーツピックアップ
- ミス・ワールド2017日本大会で特別賞を受賞
- トビタテ! 留学JAPAN 他

しなやかに挑み続ける新生・中京大学



〈発行〉中京大学 広報課

〒466-8666名古屋市昭和区八事本町101-2 TEL.052-835-7111(代)

1

収納競技

アマゾン・ロボティクス・チャレンジ
「Stow task」部門 世界3位

7月26日～30日、名古屋市港区のポートメッセ名古屋・武田テバオーシャンアリーナで「ロボカップ2017名古屋世界大会」が開催された。

中京大学は工学部・清水ゼミが ChukyoA・ChukyoB の2チームに分かれレスキューシミュレーションリーグに出場した。

また併催された知能ロボット競技大会「第3回アマゾン・ロボティクス・チャレンジ」に、工学部・橋本学教授率いる中京大学が、中部大学・三菱電機との合同チーム（チーム名：MC²）として出場した。



7月26日～30日、名古屋市港区のポートメッセ名古屋・武田テバオーシャンアリーナで「ロボカップ2017名古屋世界大会」が行われた。併催された知能ロボット競技大会、「第3回アマゾン・ロボティクス・チャレンジ」には、工学部・橋本学教授率いる中京大学が、中部大学・三菱電機との合同チーム（チーム名：MC²）として出場した。

この大会は、世界各地から応募した約30チームの中から予選を勝ち抜いた16チームが集まり、それぞれが考案したユニークなロボット（ハードウェアとソフトウェア）で、保管棚から商品を取り出し、収納する競技を行う。今年、マサチューセッツ工科大学、プリンストン大学、カーネギーメロン大学、ボン大学などが出場。日本からは、本学他、東京大学、奈良先端科学技術大学院大学、鳥取大学などが参加した。

中京大学は「Stow task」（物を棚に補充する動作）と「Pick task」（物を棚から取り出し

て箱に入れる動作）の2種目に参加し、「Stow task」部門で世界3位、日本勢ではトップとなった。なお、3位以内で入賞した日本のチームは当チームのみだった。

ロボカップ世界大会とは？

ロボット工学と人工知能の融合をめざし、1997年から始まったロボットによる競技プロジェクト。「2050年にサッカーの世界チャンピオンチームに勝てる、人型ロボットのチームを作る」ことが大会当初の目標だった。今ではサッカーに加え、救援ロボット、ジュニア向けなどの競技も行われている。



【出場メンバー】工学部橋本研究室のメンバー（院生、学部生 他）
橋本学教授
松原 一樹さん／秋月 秀一さん／伊藤 駿さん／鳥居 拓耶さん
飯塚 正樹さん／真川 智也さん／田畑 茜さん／小林 篤史さん／香西 健太郎さん

【学生たちの感想】

- 3年間参加しましたが、3位になって、本当にうれしいです。人工知能ロボット開発の難しさと楽しさを、両方味わうことができました。次は1位を目指したいです。
- 企業の人々と共同開発できたことが勉強になりました。三菱電機にも何度も出張させていただき、温かく迎えていただけたのが良い思い出になっています。
- 本番当日は競技中、本当に一喜一憂しました。自分たちが苦労して開発したロボットが、全自動で競技している姿を見て感動しました。
- 自分たちと同じように苦労しながらロボットを開発していた学生が世界中にいたのだということあらためて認識しました。将来は世界的に活躍できるエンジニアを目指しています。



入賞を喜ぶ橋本教授

大会競技を終えて

このチャレンジには、2015年度の第1回アメリカ大会から、三菱電機と、中部大学との合同チームで参画しています。世界中からすぐれた技術が集結するので、どのチームの技術も創意と斬新なアイデアにあふれた、最先端の人工知能技術、ロボット技術が惜みなく投入されています。

我々のチーム(MC²)は、人工知能技術を中京大と中部大が、ロボット技術を三菱電機が担当しました。第1回大会では世界6位でしたが、第2回ドイツ大会では世界8位に後退してしまいました。その後、ロボットの視覚技術を一新、三菱電機を中心にすぐれた実践的ノウハウを加えることによって、高性能かつ安定感のあるシステム開発に成功しました。

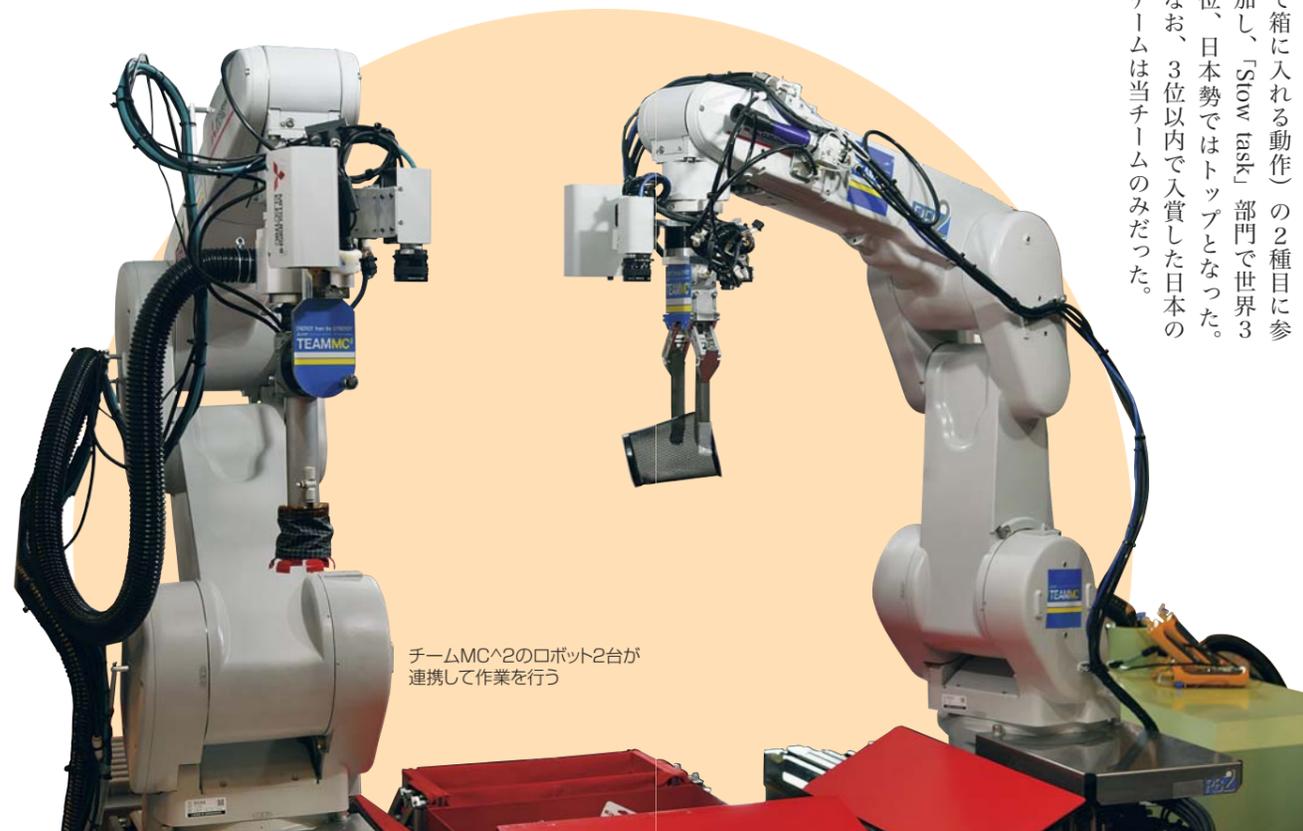
このコンテストに投入される技術は、研究としても新規で効果の高いものであることから、学術論文発表も同時に行うことができます。また開発時に、企業研究者や技術者との交流も頻繁に行われ、インターンシップや共同研究の経験を持つこともできます。本番の会場では、真剣に取り組んでいる他国、他大学の同年代の大学生らを目の当たりにすることができ、その意味でも、このコンテストの教育的意義は大きいと言えます。

今回、世界3位に輝くことができたのも、ひとえに、学生たちの努力の賜であり、彼らには最大級の賛辞を贈り、また労をねぎらいたいと思います。

中京大学 工学部長 橋本 学 教授



スクリーンに映し出された競技の様子



チームMC²のロボット2台が連携して作業を行う

ロボカップ世界大会 レスキューシミュレーションに 工学部が出場



①決勝戦の様子

②競技中の鳥居 拓矢さん



コンピュータ内の仮想市街地



【出場メンバー】 ※いずれも3年
ChukyoA: 伊藤 数馬さん/田中 勇気さん/横地 一輝さん
ChukyoB: 倉内 宏徳さん/後藤 有亮さん/鳥居 拓矢さん/森本 寛太さん



中 京大では清水優准教授ゼミが ChukyoA・ChukyoB の2チームに分かれレスキューシミュレーションリーグに出場した。これはコンピュータ内の仮想市街地で大規模災害が発生したことを想定し、4台のロボットを操作して要救助者を探し救助する競技。今回は世界各地から6チーム

が出場し、上位4チームが30日の決勝リーグへ進んだ。

予 選リーグで ChukyoA が6チーム中5位、ChukyoB が4位となり、ChukyoB が決勝リーグ進出を決めた。決勝リーグは4チーム中4位の結果となった。決勝へ進んだ ChukyoB の鳥居

拓矢さん(3年)は「自動走行システムがうまくいかなかった。まずは原因を見つけてから始めたい」と今後の課題を述べた。清水准教授は学生らの奮闘を見て「決勝まで勝ち進むことができた。世界でも十分に戦えるようになった」と期待を込めて語った。

工学部加納ゼミ 人間共生ロボットを展示



展 示ブースでは、加納政芳教授ゼミの学生らが人間共生ロボット(何もできない赤ちゃん型ロボット)を展示した。このロボットは高齢者を対象として製作されたものだが、ブースでは子どもたちが触ったり、ロボットを抱っこしたりする様子が多くみられた。ブースで説明していた中村太郎



学生の説明を興味深く聞く子どもたち

さん(4年)は「このロボットがさらに広まって高齢者の認知症対策などに貢献できたら嬉しい」と話した。また、石田峻大さん(4年)は「人間とロボットが共に生きるためにどのような環境なら深く関わるかができるのか、さらに研究をしていきたい」と抱負を述べた。

国際英語学部森山ゼミ NTTドコモブースで通訳 ロボットについて紹介



参加した学生
(左から)井上さん、(通訳した外国人客を挟んで)伊藤美月さん、伊藤真衣さん



N TTドコモブースでは「鉄腕アトム」をモデルにしたコミュニケーションロボットや携帯電話の基本機能を持ったロボット「ロボホン」が展示され、通訳ボランティアとして森山真吾准教授ゼミの伊藤美月さん、伊藤真衣さん、井上葉月さん(いずれも3年)が参加した。

「ここで販売していないのか、と聞かれた時が一番困りました」と苦笑いする伊藤美月さん。伊藤真衣さんは「ロボットの仕組みや専門用語を覚えるのが大変だった」と当日までの準備を振り返っていた。スムーズに通訳ができるよう、事前にNTTドコモ担当者に大学へ足を運んでもらい、ロボットについて勉強したという。さらに井上さんは「将来も英語に携わる仕事がしたい」と話した。

中京大学初 裁判所職員総合職試験に合格

裁判所事務官
(大卒程度区分)

裁判所職員は、裁判所等でさまざまな事務処理や、裁判の円滑な進行と裁判所の運営をサポートする職種。今年度、名古屋高等裁判所管轄区域では申込者56人のうち、最終合格者は大林さんのみ(全国の合格者15人)。

一般職の合格者は一定期間の実務を経て内部選抜(試験)により書記官への道が開かれる。一方、総合職合格者(大卒区分)は採用初年度に限り、筆記試験の一部が免除され、合格すれば、即書記官の道が開かれる。書記官に任命されれば法律の専門家として第一線で活躍していくことになる。



法学部
大林 勝太さん
(愛知県立旭野高等学校)

《合格》※太字は進路先
裁判所職員総合職
愛知県庁、国税専門官、
国家公務員一般職

入学時から、自分の能力を高める4年間にしようと考えていました。1年次のガイダンスで公務員に向けてのキャリアパスが明示されていたのを見て、公務員講座に興味を持ちました。宅地建物取引士や行政書士の資格取得に取り組

勉強は一日の時間を決めて、全試験にトライ

む中で、裁判所職員試験を知ったのが受験のきっかけです。意志が強くても、勉強は必ずやりたくない時期があるので、どう乗り越えるかが大切です。試験に落ちても知識は今後に活かせるが、客観的には何もなかった1年半になってしまふ。それが嫌だったので、常に最悪を想像して自分を奮い立たせました。また弘道塾(※)の仲間と一緒に勉強に励み、「1日何時間は絶対やる、やれなかったら罰ゲーム」と楽しみながら勉強する工夫をしました。公務員試験は第一志望を早く絞らず、全て合格する気持ちで勉強した方がいいと思います。受験したら受かった、ということもあるので、可能性をつぶさないでほしいです。
※弘道塾：公務員試験を目指す人のための施設。席数が決まっております。成績優秀者のみ専用の席が用意されている。



工学部 機械システム工学科
瀧本 美月さん
(愛知淑徳高等学校)

瀧本さんは、東海旅客鉄道(株)の鉄道事業を最前線で支えるプロフェッショナル職(車両・機械系統)に内定。好奇心と調査力で内定を勝ち取った。いわゆる「リケジョ」の瀧本さんに就職活動について話を聞いた。

理系のことに興味を持ったのは、小さいころから両親に科学館などに連れて行ってもらい、モノづくり体験をしてきたことがきっかけでした。

空港で飛行機を整備している女性がテレビで取り上げられているのを見て、「女性でも活躍できる場がある」と魅力を感じ、飛行機や電車など大きい機械のシステム、整備の仕事に興味を持ちました。

東海旅客鉄道株式会社 プロフェッショナル職

就職活動は1年半程前から始め、とにかく気になる仕事を調べました。参加したインターンシップは6社です。就職試験が始まる前段階で、さまざまな業種を体験し、社員さんの雰囲気、考え方が合っている同社を志望し、教授推薦をいただきました。

迷ったらチャレンジ

就職面接を通して、人間力、忍耐力やコミュニケーション能力が重要だと感じました。

後輩、とくに同じ境遇の「リケジョ」には、女子が少ないからと言っただけで、やりたいことをやるのが大事だと伝えたい。迷ったらチャレンジして、悩んで決めてほしいです。

リケジョの夢を諦めず
やりたいことに
積極的にチャレンジを

就職 内定者インタビュー

経営学部 長山 美貴さん インターンで子ども用の 高視認性レインコートを開発 「とういんくる★コート」



長山美貴さん
(経営学部3年)

長山さんとレインウェアメーカー・船橋(名古屋市)は、子ども達を交通事故から守るために、夜間でも高い視認性(目で見た時の見やすさ)を発揮する子ども用レインコート「とういんくる★コート」を開発した。



このレインコートには、どんな条件下でも子どもの存在がはつきり分かるように、蛍光色の生地と反射材が使用されている。商品開発やマーケティングについて興味があった長山さんは、2月から半年間、船橋でインターンシップを行った。商品づくりでは、「子どもが一人でレインコートを着られない」等のアンケート意見も参考にし、ランドセルを背負ったまま着脱できるほか、一人でも着られるような仕組みも考案した。長山さんはインターンを通して、「いろんな方と接して知識やアドバイスをもらうことで、自分もこんな社会人になりたいと思うようになった。良い経験ができました」と話す。開発したコートは販売の予定はないが、当面は交通安全などの啓発活動に使用される。

経済学部
田中 聡さん
(富山県立水橋高等学校)



大塚製薬株式会社 MR職

早くからの取り組みで
企業担当者とお話
機会を得よう

田中さんは、病院や薬局に製品の提供を行う大塚製薬(株)のMR職に内定。人の生活に影響を与える仕事がしたいと製薬会社を目指した田中さんに、就職活動について聞いた。

最初に就職活動を意識したのは、3年生の4月、経済学部の授業「キャリア・マネジメント」を受講してからです。

部活やサークルに所属しておらず、「頑張ったことはアルバイト」しかなかった私は、プレゼンテーション技術、自己分析、面接のスキルを磨くため、時間をかけて取り組みました。早め早めが功を奏し、内定につながったのだと思います。

薬は人の命に関わる製品です。製薬業界に絞ったのは今年1月頃。それまでは学内企業説明会や、さまざまなインターンシップに参加し、視野を広げました。

目標はナンバーワン

将来は、同社のMR職でナンバーワンになることを目標としています。ナンバーワンになることは、それだけ人への貢献も大きいはず。より多くの人を助けられる働き方をしたいです。早くから準備すること、インターンシップに参加し、企業の方と話す機会を得ることが大事だと後輩に伝えたいです。

平昌に向けて選手たちを応援 激励会を開催

2018年2月に韓国・平昌で開催予定の冬季オリンピックの国内予選を控えている在学生、卒業生を応援する会が、9月23日名古屋キャンパスで開催された。激励に学内外関係者180人が集まった。

フィギュアスケートの宇野昌磨選手（スポーツ科学部2年）、フリースタイルスキー・モーグルの堀島行真選手（同2年）と伊藤みき選手（2009年度体育学部卒）が参加した。

第一部、清明ホールで行われた激励会での「演技の見どころはどこですか」との質問に堀島選手は「夏はジャンプのきれいに重点をおいて練習してきました。モーグルはジャンプ、ターン、スピードが大事な競技ですが、特にジャンプを見てもらいたい」、宇野選手は「苦手なものがないところが自分の強みです。最後まで飽きずに見てもらえるように頑張りたい」と話した。

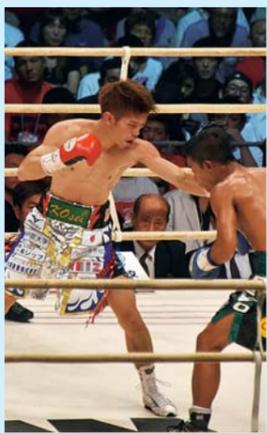
伊藤選手は、オリンピック経験

者として後輩に『オリンピックに出場したい！オリンピックで金メダルを取りたい』という強い気持ちを持つと一緒に頑張りたい』と呼びかけた。

第二部はアリーナ211に会場を移し、懇親会が行われた。



田中恒成選手が2度目の防衛に成功 タイの選手に9回でTKO勝ち



プロボクシングWBOライトフライ級世界チャンピオン田中恒成選手（畑中ジム・経済学部4年）の2度目の防衛戦が9月13日、大阪市のエディオンアリーナ大阪で行われた。同級13位のパラノン・CPフレッシュムート選手（タイ）との対戦で、9回1分27秒TKO

Pro-Boxing

勝ち。防衛に成功した。戦績はこれで10戦10勝（6KO）となった。田中選手は、1ラウンド（R）終了直前、不用意に一発を顔面に受けてダウンするなど、序盤はやや苦しい展開が続いた。しかし、ラウンドが進むにつれて主導権を握り、左ボディーなどで相手の体力を奪っていった。9Rに強烈な右ストレートでダウンを奪うと、その後も攻撃の手を緩めず、勝負を決めた。

会場には本学の学生、教職員、近畿在住の関係者ら50人近くが詰めかけ、声援を送った。

浅田 真央さん 学園首脳を表敬訪問



今年4月に現役引退したフィギュアスケートの浅田真央さんが9月5日、林田健二スケート部監督とともに名古屋キャンパスに梅村清英総長・理事長ら学園首脳を表敬訪問した。

浅田さんは、2010年のバンクーバーオリンピックで銀メダルに輝き、世界選手権を3度制するなど多くの人に感動を与え、フィギュアスケート界を盛り上げてきた。選手生活を振り返って、「最後のシーズンが一番大変でした。でも、復帰していなかったら、すっきりした気持ちで終わることができなかった。復帰を経験してから、引退を決断して良かったと思います」と笑顔で答えた。

梅村総長・理事長が「多くの人に計り知れない感動を与えてくれましたね」と述べると、「フィギュアスケートの環境が良くない時期に中京大学がスケートリンクを作ってくださいただ私だけではなくスケート選手みんなが救われました。このリンクがなければここまで成績を残すことはできなかったと思っています、とても感謝しています」と浅田さん。また、安村仁志学長は「良い成績を取られたことは大きな喜びですが、みんなから愛されている選手だったということが一番嬉しいことです」と述べた。

梅村総長・理事長は「これからが人生の本番。よい夢を見つけて頑張ってください。応援しています」と激励した。

モーグルの 堀島行真選手 夏の練習を公開

フリースタイルスキーの世界選手権（3月、スペイン）モーグル・デュアルモーグルで2冠を達成した中京大学スキー競技部所属の堀島行真選手（スポーツ科学部2年）が、6月24日豊田キャンパス、6月28日三重県桑名市のウオータージャンプ場「K'air」で報道関係者に練習を公開した。

24日は豊田キャンパスのトレーニング室でフリーウエイター、ドームバランス、着地のサーキットトレーニングなど、体幹やバランスを強化する陸上トレーニングの一端を披露した。

K'airはジャンプの技を試してプールの飛び込む施設。堀島選



FreeStyleSki-Mogul

手は小学生の頃から練習場所に行っている。公開練習は、K'air側の厚意で実現した。堀島選手は、「ダブルフルツイスト」（伸身後方1回転2回ひねり）と、「コーク1080」（テンエイティ）（体を水平に傾け3回転）の二つの高難度の技を交互に飛び感触を確かめていた。集まった新聞社やテレビ局の取材担当者には技の特徴などを丁寧に説明し、「技をさらに磨いて、オリンピックを目指したい」と話していた。

今後は日本代表合宿、W杯参戦のうへ、2018年2月の平昌オリンピックを目指すことになる。



SMART CAMP 2017

8月4日〜6日、豊田キャンパスにおいて「SMART CAMP 2017」が実施された。この催しはスポーツ科学の知見

Judo-Camp

を応用し、参加者の柔道の競技力向上を目指すもの。また、中京大学体育会柔道部ならびに中京大学スポーツ科学部を、広くPRすることも狙いとしている。3日間の合宿形式で行われ、全国の高等学校26校から男子232人、女子78人が参加した。

合宿では稽古や練習試合に加え、トレーニング方法や栄養と体育など、科学的な視点から柔道を知るための講義も実施された。なお、今回は世界柔道選手権大会2010の優勝者で、日本代表コーチの秋本啓之氏を招聘し、特別講習では「秋本返し」「背負い投げ」の指導も行われた。

C H U K Y O U N I V E R S I T Y S P O R T S T O P I C S



国際英語学部 工藤 月花さん ミス・ワールド2017日本大会ファイナリスト 特別賞を受賞



9月4日、ANAインターコンチネンタル東京で行われた「ミス・ワールド2017日本大会」に工藤月花さん（国際英語学部国際学専攻3年）がファイナリストとして出場し、特別賞として「ミス・ヨガ」を受賞した。

この大会は、世界最大のミスコンテスト「ミス・ワールド2017世界大会」に出場する日本代表を選ぶもの。参加資格は満18歳以上、27歳以下で日本国籍を有する未婚女性。応募総数7150名の中からファイナリスト31名が選ばれた。さらにその中から日本代表として1名が選出される。



ミス・ワールドは、世界3大ミスコンテストの中で最も歴史が古く、66年に渡り開催され参加国数最多を誇る世界最大規模のミスコンテスト。

大会の審査項目は Beauty with a Purpose（慈善活動プレゼンテーション）・モデル部門・スポーツ部門・チームワーク部門（自衛隊審査）・タレント部門・ディベーター部門（英語でのスピーチ）・マ

ルチメディア部門（商品PR）がある。審査期間は約1ヶ月。工藤さんはこの7項目のうち、モデル部門で9位、タレント部門で入賞、ディベーター部門で入賞した。

日本の魅力を世界に

大会を終えて工藤さんは「とても緊張しましたが、今までの想いをぶつけてステージに立つことができました。受賞することができとても嬉しいです。今後は2020年に行われる東京オリンピックに向けて自身のフィギュアスケートの経験を伝え、スポーツの魅力をもっとの人に伝えたい」と話した。さらに続けて「海外留学経験を通して日本の良さを改めて感じたので、日本の魅力を世界に発信するためアナウンサーとして働いてみたい。また異文化について触れることも好きです。世界を飛び回りさらに関心を深められそうな、外資系エアラインにも興味があります」と今後の活動や将来の夢について話した。

ミス・ワールド日本代表には山下晴加さんが選ばれた。



【中京大生に向けてメッセージ】

この大会に出て一番感じたのは、今までやってきたことに無駄なことはなかったということ。フィギュアスケート身につけた体力や精神力、礼儀を活かすことができ、スポーツ審査やタレント部門でも実技を披露しました。交換留学の経験のおかげで、英語ディベートで入賞することができました。プレゼンテーションの部門でも大学で学んだことを発揮できました。中京大学はスポーツ・勉強、すべて環境が整っているので、フル活用しているんなことに挑戦し、将来につなげてほしいです。



文部科学省 | トビタテ！ 留学 JAPAN 日本代表プログラム 7期生に意気込みを聞きました



フランスへ



中村 倅我さん
(国際教養学部3年)

1 テーマ
「フランスから『日本酒』の可能性を広げる」をテーマに、8月末よりフランスに11か月間留学する。語学学校に通いながらイベントを開催するために活動する予定。

2 留学のきっかけ

大学2年生の秋から、セメスターでフランス（レンヌ）の語学学校に留学。フランス語を学ぶとともに、文化、生活を学んできた。フランスで日本の文化は人気があつて有名。ご両親の影響で日本酒が好きで中村さんが、お土産用に現地で渡した日本酒は好評で、「おいしい」と驚かれた。フランスにはまだ日本酒が浸透していないことを実感し、魅力伝えるチャンスがあると思った。

フランスで日本酒のイベントが行えるよう、酒造メーカーにアポイントをとるなど日本でも活動している。

3 意気込みは？

日本酒をフランスに広めることがテーマ。来年の6月に日本酒のイベントを行いたいと考えており、フランス人の集客はもちろん、日本酒のおいしさを伝えるためにフランス語でのプレゼンテーション、試飲会の開催などを企画したい。構想もすべて自分で考えなければならぬので印象に残るようなイベントを開きたい。



ニカラグアへ



高田 浩気さん
(スポーツ科学部4年)

1 テーマ

国際協力の第1歩を踏み出すため、中米・ニカラグアに9月から出発。1年間の期間で、現地のNGO団体「FUNDECI」（4か月半）「SUPEREMOS」（11か月半）ボランティアとして働きながら、ニカラグアの現状や、発展途上国の教育について学ぶ。

2 留学のきっかけ

教師を目指して入った教育学科では小磯透教授のゼミで学んだ。小磯教授に海外経験を勧められたことをきっかけに、大学3年夏、カンボジア・スタディーツアーに参加。ストリートチルドレンの現状などを目の当たりにし、世界の教育に関わりたいという思いが生まれた。

ニカラグアを選択した理由は、将来国際協力機関で働くことに興味があったから。様々な条件がある中で、「発展途上国」「スペイン語圏」「安全性」を軸に選んだ。

名古屋にニカラグアの会というNGO団体があり、直接話も聞いている。

3 意気込みは？

将来、国際協力の中でも教育に関する分野において、世界で活躍できるような人材になれるよう、発展途上国のニーズや考え方を学びたい。また、現地に行っているからこそ分かる中米（ニカラグア）の良さを日本に発信していきたい。



発信

オープンキャンパス 2017開催 名古屋キャンパス 2日間で約7,900人が来場



中京大学「オープンキャンパス」が7月16、17日の2日間で約7,900人が来場した。

開始直後から高校生や保護者で賑わい、2日間で約7,900人が来場した。

テーマは「中京大生になれる1日」。各学部の教授による模擬講義や入試説明、保護者ガイダンスなどさまざまなイベントが行われ、高校生らは普段の授業とは一味違う大学の講義を体験した。

なお、豊田キャンパスでのオープンキャンパスは9月17日に3学部（現代社会学部、工学部、スポーツ科学部）を中心に行う予定だったが台風のため中止となった。

そのかわりとして、11月4日に豊田キャンパスで施設見学会を開催予定。

8月23日から25日まで「SPODフォーラム（四国地区大学教職員能力開発ネットワーク）2017」が徳島大学で開催され、中京大学学術情報システム部サポートのもと、岩田庄平さん（法学部3年・学術情報システム部TA）が23日に行われたポスターセッションで最優秀賞に選ばれた。

ポスターセッションには、複数大学によるプロジェクトチームなどをはじめ24チームが参加。岩田さんは「学生による情報センターサービス向上のための啓蒙活動」と題して、本学の情報センターが抱えている問題について学生の視

啓蒙 岩田 庄平さん(法学部)

SPODフォーラム2017 ポスターセッションで最優秀賞



【SPODフォーラムとは】
SPODフォーラムは、大学等の教職員が自らの能力開発のために開かれる研修会。多種多様で質の高いFD/SDプログラムづくり、組織を超えた持続的な相互交流・関係づくりの場として毎年開催されている。

点から解決策を提案、学生による主体的な取り組みとして評価され、見事最優秀賞に選ばれた。

岩田さんは「自分たち学生のために、これだけ多くの教職員の方々が学んでいる姿を拝見し、非常に刺激を受けました。最優秀賞という名誉をいただいたことに感謝するとともに、もっと精進していきたいです」と話した。

9月21日、安村仁志学長から学長賞が贈呈された。安村学長は、職員と学生が協力して最優秀賞を得ることができ、大変嬉しく思います」と学長賞授与の理由を語った。

大学での「学び」を高めたい。広めたい。

学部の垣根を越えて プレゼンテーション 技術を学ぶ

交流



プレゼンテーション技術の習得をテーマにした学部間交流ワークショップが8月23日、名古屋キャンパスで開催され、1〜4年の7学部18人が参加した。

学部間交流ワークショップとは、中京大学でFD活動を推進する教育推進センターの部会が能動的学修（アクティブラーニング）のきっかけづくりを行うために主

催するイベント。

今回は、①パソコンでパワーポイントなどを用いて行うプレゼンテーションのスキルを身に付けること、②学部の垣根を越えた交流で刺激し合い、主体的な学修を身に付けることを目的に開催された。同ワークショップは、次回10月に開催する予定だ。

高大接続入試 経済学部 単位認定型講義を実施

2018年度入学から実施する高大接続入試「経済学部単位認定型講義」が8月2日、3日の2日間実施された。

高大接続入試は、まず、高校3

年生が中京大学経済学部生と一緒に「経世済民の学び」の集中講義を受け、講義の課題を提出し、成績が付与される。次に、成績を確認したうえで出願。10月に実施さ



れる面接を経て、講義の成績と面接の総合評価で合否が決まる新しい入試形態だ。この入試方式で中京大学経済学部に入学した場合、1単位を認定される。

今回の集中講義は、中部地区および九州、四国、北陸などから参加した高校生164人が受講。授業は、経済を学ぶ上で必要な基礎的な内容だが、高校と大学では授業の学び方が違うため、高校生にとっては戸惑うこともあったようだ。担当教員は、高校生が理解できるように、専門用語をなるべく使わず、高校教科書に載っている内容にも触れながら授業を行った。2018年度の高大接続入試は国際英語学部、法学部でも実施される。

2017年度 春学期卒業式

2017年度9月卒業学生の春学期卒業式が、9月19日、名古屋キャンパスヤマテホールで行われ、大学院2人、学部53人が新たな一歩を踏み出した。

安村仁志学長と梅村清英総長・理事長はそれぞれ式辞、祝辞を述べると卒業生の門出を祝った。

卒業生の一人、湯浅直樹さん（体育学研究科）は、アルペンスキー回転種目の選手として活躍する傍ら、2013年に大学院に進学。湯浅さんは、学長から手渡された学位記を笑顔で受け取った。



奨学金 公益財団法人 服部国際奨学財団と協定を締結



学校法人梅村学園と公益財団法人服部国際奨学財団は6月8日、中京大学在学生を中心とする梅村学園の学生・生徒に対して、継続的に奨学金を提供する包括協定と覚書を締結した。名古屋キャンパスでの締結式には、梅村清英総長・理事長、服部国際奨学財団の瀬田大理事長らが出席した。

この協定は同財団の活動を社会に発信し、多くの学生・生徒に奨学金受給の機会を与え、経済的に恵まれない学生が安心して就学できるようにすることが目的。今後は同財団が主催する奨学生向けの各種イベントで、本学がプログラム開発の補助や講師派遣等の支援を行い、奨学生の人材育成に貢献していく。

国際協力 JICAと開発途上国支援のための覚書を締結 学生、教員によるスポーツ指導で支援



中京大学は独立行政法人国際協力機構（JICA）と開発途上国における支援のため、6月16日、教員、学生を派遣する連携事業の覚書を締結した。名古屋

キャンパスで行った記者会見には、JICAからは阪倉章治中部国際センター所長他4人、本学からは安村仁志学長他教員、学生を含め9人が参加した。

JICAと大学との連携事業は、開発途上国においてスポーツ分野での技能向上を支援するとともに、大学の国際協力分野で人材育成を図ることが狙い。今回は、本学のソフトボール部の学生、教員をアフリカのボツワナ共和国に、柔道部の学生、教員を南米アルゼンチン共和国に派遣する。両部は全国トップレベルの実力を有する。派遣は20歳以上の2～4年生が対象で、来年春休みの1か月間を予定している。

2014年度から大学との間で連携事業を続けるJICAが、スポーツ分野で中部圏の大学と覚書を結ぶのと、アフリカでのスポーツ分野の大学連携はともに初めて。

インターンシップ メ〜テレとインターンシップ研修の覚書を締結 今秋から開始

中京大学とメ〜テレ（名古屋テレビ放送）は今秋からインターンシップ研修を開始する。その研修に関する覚書が7月27日、安村仁志学長とメ〜テレ横井正彦代表取締役社長との間で締結された。

これまで多くのアスリートを輩出してきた本学と、メ〜テレスポーツ部が「映像」分野でコラボレーションする。学生自身が大学所属のアスリートを取材・撮影して編集まで行う専門的、実践的な内容を体験できる場として、映像制作に特化した研修となるのが特徴だ。

今後は学生を選考し、10月から研修を始める予定（初年度は半年間）。取材対象は、陸上競技、水泳をはじめとする体育会の39全競技。インターン学生は経験を積みながらオリンピック種目を中心に幅を広げていく。また、学生が制作したコンテンツは、YouTubeのメ〜テレチャンネルなどで放映される。

地域教育 大府市・大府市教育委員会と 中京大学との連携に関する協定を締結

中京大学は、6月28日、大府市・大府市教育委員会と連携に関する協定の締結式を大府市役所で行った。大府市からは岡村秀人市長、山内健次副市長、本学からは安村仁志学長、現代社会学部・辻井正次教授らが参加した。

大府市・大府市教育委員会と本学は、これまで辻井教授による、同市の小中学校における児童・生徒の発達に関する様々な調査、それに基づく指導、研修を通して20年以上にもおよぶ関係を結んできた。今回は、地域の子どものためのサポート活動で、心理と体づくりの両面から支援できるよう、心身の発達を研究するプロジェクトとして連携する。

また、この連携を機に、本学は文部科学省からの委託プロジェクトとして2015年から始まった「子どもみんなプロジェクト」(*)に参加する。

※子どもみんなプロジェクト：日本の10の大学と各自自治体が協働し、教育現場と研究現場が連携するために始められたプロジェクト。教育現場の問題意識を研究者が受け、子どもに対する教育プログラムや現場の先生方への研修プログラムに還元する。

学会受賞 経済学部 近藤 健児教授 2つの学会賞を受賞



経済学部の近藤健児教授が6月18日に日本応用経済学会著作賞を、10月7日に日本地域学会著作賞を受賞した。対象となった著作は『The Economics of International Immigration』（Springer, 2016年10月刊行）。

近藤教授がこれまで取り組んできた労働移動に関する理論研究が集約された本書は、英文誌に掲載された諸論文を土台に構成されている。先進国が直面する経済の諸問題を考慮に入れ、国際労働移動とりわけ外国人労働受け入れの及ぼす経済効果を理論的に分析した。分析手法の独自性と、政策的な示唆に富んだ多くの提言が、方向性の異なる2つの学会から揃って評価され、今回のダブル受賞に至った。

ゼミ活動 現代社会学部・成ゼミ 「あいち子ども食堂ネットワーク」の創立総会に参加

「あいち子ども食堂ネットワーク」の創立総会が6月24日、中京大学清明ホールで行われ、約300人が参加した。「子ども食堂」は、経済的な理由で食事が十分に取れない子どもや、共働きなどで孤食の子どもに低料金で食事を提供している。また、ボランティアの大学生が子どもたちに勉強を教える交流の場にもなっている。

現代社会学部・成元哲教授のゼミは、愛知県内にある子ども食堂のうち、この2年間で30ヵ所以上を実態調査し、報告書にまとめた。今回、成教授の呼びかけで約20団体が同ネットワークに加入した。その後、子ども食堂へ寄付をした(株)マルト水谷の梶田知代表取締役への感謝状贈呈、NHK報道局制作センター・チーフプロデューサーの板垣淑子さんによる講演も行われた。

国際交流 「日台大学合唱団による国際交流の夕べ」 国立台湾大学と音楽で交流



国立台湾大学のEMBA(*)合唱団が来学し8月30日、演奏会が名古屋キャンパスアレーナ211で開催された。

この演奏会は、前学長北川薫学事顧問の友人である同合唱団榮譽顧問・黄彬彬氏とのつながりで実現した。

中京大学混声合唱団が日本の童謡など5曲を歌い、次に蘇顯達教授のヴァイオリン演奏、台湾大学による合唱が続いた。ヴァイオリン、台湾大の合唱には会場から歓声が沸き起こり、アンコール演奏もなされた。日台交流の素晴らしい演奏会に、教職員・市民の方々など120人の聴衆も魅了された。

演奏会後の懇親会でも双方の歌が続き、最後は全員が「花は咲く」を合唱。言葉の垣根を越えた音楽の交流の場となった。

※EMBA：Executive Master of Business Administration

Chukyo Senior High School

陸上部 インターハイ陸上女子400メートルリレー 優勝した選手らが学園首脳を表敬訪問

中京大学附属中京高校の陸上部女子5人が大竹有二校長、北村肇監督とともに全国高校総体陸上競技（インターハイ）の報告で9月8日、梅村清英総長・理事長ら学園首脳を訪ねた。

附属高校陸上部はインターハイの女子4×100メートルリレーで優勝。記録は高校歴代4位となる45秒48の好成績で、男女共学になってから初の全国優勝となった。

硬式野球部 夏の甲子園、名門同士の対戦で惜敗

第99回全国高校野球選手権大会に2年ぶり28回目の出場をした附属中京高校は8月11日、大会第4日の第1試合で古豪・広陵（広島）と対戦した。試合は伊藤康祐主将（3年）の本塁打で先制したものの、6対10で惜しくも逆転負けを喫した。しかし、最終回には3点を返す猛攻を見せ、粘り強さを発揮。在校生や野球部員、チアリーダー、教職員のほか、保護者、OBら応援団で埋め尽くされたアルプススタンドからは、チームの健闘に惜しめない拍手が送られた。